世界遺産の保全と活用を支える社会的ネットワーク

—岐阜県白川村とベトナム・ホイアンの事例から—

The World Cultural Heritage and Social Networks：Examples in Shirakawago and Hoian

芹澤　知広*
Satohiro Serizawa

第１章　世界遺産登録と世界遺産研究の動向

本稿は、平成16年度奈良大学総合研究所研究助成を得て行われた、「アジアの歴史的地域における文化遺産保存のネットワークについての予備的研究　－白川郷とベトナム・ホイアンを中心にして」、に関して報告するものである。本稿の前半では、世界遺産研究と社会的ネットワーク研究について概観し、後半では、世界文化遺産に登録されている岐阜県白川村荻町集落とベトナム・ホイアン市の事例をとりあげる。

今日のユネスコの世界遺産は、1972年に採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に始まる。日本は、1992年に条約を批准し、1993年から世界遺産への登録が始まり、今日に至るまで新しい世界遺産を毎年のように国内に誕生させている。そして、奈良大学では、1998年に「古都奈良の文化財」が世界遺産に登録されたのをきっかけに、「世界遺産コース」が開設され、世界遺産の研究が進められることになった。

日本の歴史を通じて重要な場所であった奈良の文化財が、日本という国を超えた人類全体の遺産として評価されるということは、奈良にあって奈良の研究に関わる人々には当たり前のことのように映るのかもしれない。しかし、世界遺産をめぐる国内・国外の動きを見てみると、貴重な文化財のなかには、昔から変わらず評価されてきたものばかりではなく、「文化財」や「世界遺産」としての価値があると発見され、相応の評価を得るために人々が尽力してはじめて今日の名声を獲得したという例も見つけることができる。

訪れる観光客への奈良の人々の対応を揶揄する慣用句に、「大仏商法」ということばがある。「大仏」のような確立された文化財があるから、営業努力をせずとも、観光客が多く集まる。同じようなことが、文化財指定や世界遺産登録にもいえる。奈良や京都の町のなかに住む人々

平成17年８月４日受理　*社会学部現代社会学科助教授

は、自分たちの住んでいる地域が「世界遺産」であることをそれほど意識しているわけではない。人々の生活や日々の努力とは無関係に、「大仏」のような文化財・世界遺産が、過去から現在まで、さらには未来永劫存在するかのように、住民に映っていることがその理由なのかもしれない。そのため、世界遺産の保全と活用が地元の人々によって支えられていることが、奈良や京都では見えにくいという傾向がある。

そのことに関わる興味深い例をさらに付け加えよう。奈良の法隆寺は文化財保護法成立のきっかけとなった場所であり、日本の世界遺産第1号でもある。法隆寺の世界遺産リスト推薦は、登録に遡る2年前に文化庁から打診があったことに端を発し、その後の手続きも法隆寺や地元の自治体とは関係なく、すべて文化庁とICOMOS（国際記念物遺跡会議）によって行われたという。そのため、法隆寺には、世界遺産関係の文書は、その認定状1枚があるだけらしい[1)]。

日本では、その後、各地で多くの自治体が世界遺産登録を目指して積極的に働きかけをするようになったが、世界各国においても同様の動きがある。多くの国々において、世界遺産は、外国人観光客の誘致や、遺跡研究を通じた国際協力・国際援助を引き出すための重要な資源として位置付けられている。このことは、とくに世界経済のなかで劣位に置かれた「第三世界」の国々では切実な課題である。

世界遺産登録には当初から地域的な偏りがある。「第三世界」の国々にとっては、世界遺産は当たり前のようには存在していない。2005年4月現在においても、世界遺産を多く擁する国は、スペイン（40件）、イタリア（38件）、ドイツ（30件）、フランス（28件）、イギリス（26件）とヨーロッパに偏っている。「第三世界」の国でこれに並ぶのは、中国（30件）とインド（26件）の両大国のみであり、とくにアフリカ地域では、批准国が39カ国あるにもかかわらず、登録件数は63件しかない［石井　2005：7］。

このヨーロッパ偏重に対応するものとして同じく指摘されてきたのは、ヨーロッパの石造建築物が世界遺産登録の規準として想定されてきたということである。日本の場合も、それに匹敵する木造建築物の法隆寺と姫路城が最初の世界文化遺産になっている。「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」の第1条で定義される「文化遺産」は、「記念工作物」、「建造物群」、「遺跡」であり、「記念工作物」と「建造物群」に含まれる代表的な対象が、現存する建築物であることは明らかである。なお、世界遺産には、「文化遺産」と「自然遺産」、そしてその両者を兼ねる「複合遺産」があるが、登録数のうえでは今のところ文化遺産が圧倒的に多い。

そして、この世界遺産登録の傾向が世界遺産研究の傾向に反映している。現在のところ、世界遺産研究の中心は、文学でも歴史学でも考古学でもなく、建築学などの工学の分野である。これは、後に紹介する白川郷やホイアンなど、地域社会と直接に結びついた世界文化遺産においても同様である。もちろん、白川郷やホイアンという歴史的地域では、歴史研究が重要性をもつことは論をまたないが、その場合も政策上の影響力は、工学出身の「建築史」の専門家が行使しているといってよい。

以上のような、世界遺産登録と世界遺産研究の現状をふまえてみるならば、今後の採るべき世界遺産研究の方向性が明らかとなるにちがいない。ひとまず奈良大学に関係するものとして、

2000年に出版された世界遺産コースの教科書を検討してみたい［奈良大学文学部世界遺産を考える会　2000］。世界遺産を学ぶための概説の部分が始めに置かれた後、「日本文学研究」、「歴史研究」、「文化財研究」、「環境研究」による事例研究の章が続くが、残念ながら建築学や土木工学など工学分野に関係する章は全く含まれていない。さらに残念なことには、社会科学的な問題意識からのアプローチが全く想定されていない。

繰り返すが、今日世界の多くの国々、地域では、観光開発や地域活性化の政策と結びついて、世界遺産リスト登録への準備が着々と進められている。今までは「世界遺産」として認められてはいなかったものを、地元の人々の協力をはじめとして、国家の政策や外国の援助を通じて、世界遺産として認めさせようという動きが、日本も含め世界の各地に見られる。この現象を、「建築物」や「遺跡」自体に関わる問題としてではなく、それらをめぐる社会的な問題として、より広く学問的に把握すべきであることは誰の目にも明らかであろう。例えば、ユネスコという国際組織を通じた文化政策や、世界遺産をめぐる国家間の関係や地方行政について研究する政治学や経済学。また、世界遺産を擁する地域社会の動態や、地域と国家、さらには国際社会との関係のあいだにある人々の利害・理念の衝突などについて研究する社会学や文化人類学。このような学問分野に特徴的なアプローチこそ、将来の世界遺産研究に大きく貢献するはずである。社会のなかで世界遺産をいかに保全・活用していくのかという問題は、今後の世界遺産研究において重要性を増すことはあっても、必要ではないとして無視し続けることは決してできない。

本稿では、この世界遺産研究の現状をふまえ、以下では、２つの世界文化遺産の事例を紹介しながら、世界遺産への社会科学的アプローチのひとつのかたちを例示することにしたい。

第２章　社会的ネットワークへの着目

本稿では、社会科学的アプローチを試みる手がかりとして「社会的ネットワーク（social networks)」に着目する。「ネットワーク」や「ネットワーキング」は、1980年代以降、日本の新しい社会運動のかたちを示すキーワードとして多く用いられるようになり、情報技術の発達にともない、近年は「コンピュータ・ネットワーク」という用語もよく使われるようになった。

点と、それらを結ぶ線の関係に抽象化し、あらゆる現象に適用可能であることが、ネットワーク概念の特徴であるが、現実の社会現象を把握するうえでは、少なくとも次の３つのネットワークを分けて考えるべきである。なお、ここで便宜上３つの側面に限定して紹介する理由としては、筆者の個人的な問題意識がある。筆者の研究フィールドである中国社会研究の分野では、1990年代以降、東西冷戦の終わりとアジア経済の繁栄を背景として、「華人ネットワーク」ということばを使った研究が盛んに行われてきているが、その多くは次の３つを漠然と混在させており、記述や議論の対象が不明瞭であることもしばしばである。

（1）　確固とした「社会構造」と対比された個人の自由な結合としての「社会的ネットワーク」（おもに社会学・社会人類学の分野が扱う）

（2） 階層でもなく市場原理によるのでもない、柔軟な組織の運用、あるいは組織間の連携（おもに経営学・組織論の分野が扱う）

（3） 1地点・1国家を超えた複数の場所のあいだの連携（おもに国際関係論や、世界システム・地域システムを対象とする歴史学の分野が扱う）

現実の社会現象のなかで、これらが混在していることはありうる。華人ネットワーク論のなかで、そのことがよく見られる理由のひとつは、華人（中国国外の中国系の人々）のビジネスのありかた自体に求めることができる。会社組織を成してはいるが企業家個人の権限が大きく、またその業務はしばしば複数の国家にまたがった貿易を含む。

本稿では、様々なネットワークのなかでも、社会学・社会人類学の分野で基本的に考えられている、個人と個人のあいだを結ぶネットワーク、「社会的ネットワーク」（「社会ネットワーク」ともいう）に対象をしぼることにしたい。また、歴史的・民族誌的記述に重きを置き、その社会現象をネットワークの構造に還元して分析を行うことはしない。そのため、ここでの作業は、いわば「原始的な」社会的ネットワークの記述であって、今日の水準の「ネットワーク分析」ではない。

社会的ネットワーク論の系譜のひとつは、構造機能主義への批判として1950年代に登場したマンチェスター学派の社会人類学に求められる。その研究では、都市的状況のなかで構造から解き放たれ、選択的な行動を行う個人が対象になり、自己を中心に個人と個人が結ばれたネットワークが扱われた。しかし、当時のイギリスの社会的ネットワーク研究は、部分的なネットワークの記述・分析でしかなく、それがネットワーク全体の解明やネットワーク分析の一般論へと進むには、続く時代のアメリカ合衆国での革新を待たなければならなかった。そして社会的距離の測定など、社会構造の数理的分析が1960年代に発展し、そのなかから、著名なグラノベッターの「弱い紐帯の強さ」の議論も生まれてきた［Scott 1991： 33－34］。

また近年のネットワーク研究は、社会的ネットワークから出発して、人間社会と自然界を貫く法則の解明を目指した、より汎用性の高い概念の適用へと向かっている。社会心理学の分野ではよく知られていた「スモールワールド」現象を、1990年代に再検討したワッツとストロガッツの研究は、科学のパラダイム革新についての話題を盛んに提供している［ワッツ　2004；ブキャナン　2005］。

この過去の経緯と現状をふまえるならば、本稿の記述のスタイルは、ミッチェルが1969年にラドクリフ＝ブラウンの用法を引用しながら、「ネットワーク」という概念が今までは比喩的にしか用いられてはこなかったと指摘した段階に留まっているといえるかもしれない［ミッチェル　1983：10－11］。しかし比喩的ではあれ、「社会的ネットワーク」ということばを用いることは、未発達である世界遺産の社会科学的研究という分野においては、十分意義があると考えられる。

世界遺産は、保存制度や行政組織によって階層的に維持されているのではなく、そこに関わる様々な背景を負った個々人が、それぞれのネットワークを利用しながら、様々な方面での活

用を日々考えることで維持されている。例えば、近年日本の人類学者が行ったスペインの世界遺産についての研究では、遺産の保護と活用を目的とした一義的な機能集団のイメージからは逸脱した、別の担い手イメージが、遺産を監視するボランタリー・アソシエーションの会員、個々の社会的ネットワークに着目されることで描き出されている［竹中　2005］。

そのため、世界遺産研究を文化財や遺跡そのものに限定した研究から解き放ち、様々な人々が様々に世界遺産と関わっている現状そのものを記述するということが、ひとまずは本稿の目的になる。

第3章　岐阜県白川村荻町の観光開発と社会的ネットワーク

1　世界文化遺産・荻町合掌造り集落の概要

世界文化遺産に登録されている「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は、岐阜県と富山県の3つの合掌造り集落を含んでいる。その3つの集落は、岐阜県白川村の荻町集落、富山県平村の相倉（あいのくら）集落、富山県上平村菅沼集落である。荻町が白川郷、相倉と菅沼が五箇山に含まれる。白川郷・五箇山ともに、白山に隣接する高地であり、日本有数の豪雪地帯になる。人々の暮らしには、中世から浄土真宗が深く入りこみ、村々には平家の落人伝説が残っている。今日では、名古屋から、あるいは金沢・高岡から、整備された自動車道路を使って容易にこの地に足を運ぶことができるが、つい数10年前までは交通の便は悪く、「日本の秘境」というイメージも流布していた。

この地域に特徴的な「合掌造り」の民家（地元の人々は「合掌」と呼んでいる）は、江戸時代に起源をもつ。社会学者・柿崎京一の研究によると、加賀藩の「大窪大工」が民間建築に進出する時期と白川郷の産出する生糸・焔硝の搬出が盛んになる時期が一致する18世紀初頭に合掌造りの始まりが辿れるという［白川村史編さん委員会　1998a：808］。

合掌造り民家が保存の対象となったのは、五箇山が早く、相倉と菅沼は1970年に国の「史跡」に指定されている。いっぽう白川郷の荻町は、1975年に文化財保護法が改正になった後、1976年に「伝統的建造物群保存地区」に指定されている。1995年の世界遺産登録時点では、登録地内に、相倉では9棟、菅沼では20棟、荻町では59棟の合掌造り家屋が保存されていた。

五箇山と白川郷では、合掌造り民家の数に大きな違いがあるが、その保存の方法にも大きな違いがある。白川郷の場合には、集落の住民がその保全に大きく関与しており、そのことに対する意識が高い。ある住民のことばを借りれば、次のように対比される。「五箇山は史跡ということで自由がない。しっかり残っているが活力がない。若い人がいないし、しかたがない。こちらは［白川郷は］何か生き生きしている。でこぼこのある社会。切磋琢磨して活性化している。」

この白川郷の特徴となる、昔からの慣習が集落保存のために現在も残っていることと、歴史を経て育まれてきた祖先の遺産を継承しながら人々が生活していることについては、世界遺産に推薦するためにつくられた文書のなかにも明言されている［白川村史編さん委員会　1998a：698］。

現在の白川村にあたる地域は、江戸時代は天領であり、1875年になって白川郷42か村のうち23か村が合併して白川村が誕生し、18か村が合併して荘川村が誕生した。また残りの1つの森茂村は、清見村に編入された。なお、文献によっては近世の白川郷を43か村と数えている場合があるという。これは、荻町が天領と照蓮寺領の相給村であったため、2か村と扱っていることが理由である［白川村史編さん委員会　1998a：12］。

現在白川村で重要な地区には、村役場をはじめ公共施設のある鳩谷（はとがや）、合掌造り民家のある荻町、白山への登山口にあたり、温泉もある平瀬の3集落がある。しかし、荻町への観光客の集中とは対照的に、平瀬温泉への観光客は減少しており、2001年には、平瀬のレジャー施設「クアハウス白川郷」が閉館している。

1995年の国勢調査によると、白川村の人口は、1,893人、世帯数は662である。また同年の産業別就労人口比は、第1次産業が4.2パーセント、第2次産業が38.3パーセント、第3次産業が57.5パーセントである。この地域に特有の合掌造り民家が第二次世界大戦後、急速に失われていったことと関係があるが、この地域はいわゆる「電源地域」であり、ダム建設に関係した建設会社も多くある。また合掌造り民家を中心にした観光業も盛んである。

白川村を訪れる観光客は、1995年の世界遺産登録後に、大きく増加している。白川村の入りこみ状況の統計によると、1995年度には日帰り客が67万4千人、宿泊客が9万7千人で、総数77万1千人であったのに対し、4年後の1999年度の統計では、日帰り客が100万3千人、宿泊客が9万2千人、総数が109万5千人になっている。

2001年に行った白川村教育委員会担当者とのインタビューによれば、かつて観光客が70万人に満たなかった時代には、白川郷はもっぱら夏型観光で、5月から10月にかけての観光シーズンにしか観光客が村にいなかったという。1987年から冬の週末に合掌造り民家をライトアップすることを始め、冬にも観光客が来ることになり、近年は雪が降れば降るほど、このライトアップを見るための観光客が多く来るような状況になっている。そのなかの多くは、2時間しか滞在しない日帰り客だが、バス200台で1台50人としても、600人しか住民のいない荻町に1万人の観光客が入ってくるという計算になる。そのため、2001年時点では、週末はバスを70台に制限し、旅行代理店に抽選で許可を与えていた。

2　観光開発と保存運動の始まり

現在の荻町に見られる観光地としての白川郷はいつ、どのように始まったと考えられるであろうか。「秘境」としての飛騨の文化に対する都会の人々の好奇心は、すでに19世紀から始まっている。なかでも合掌造り民家と結びついた「大家族制度」には、当初から学問的な関心が集まった[2)]。また、ドイツの建築家、ブルーノ・タウトが1933年に白川村を訪れ、合掌造り民家を絶賛したことで、建築史上の白川村の価値が付与されることになった。しかし、一般の人々が大挙して白川村を訪れるには、国鉄（当時）のキャンペーン「ディスカバー・ジャパン」に代表される、1960年代から70年代にかけての「秘境ブーム」の時代を待たなければならなかった。

前述したように白川村は、第二次世界大戦後、電源開発によるダム建設が進み、村の水没や

離村が相次ぎ、合掌造り民家は生活の文脈から切り離されたかたちで移築されていった。そのなかで、荻町では、戦後に郷土芸能の県外興行や農業改良運動を通じて白川村を後に牽引するリーダーを輩出し、とくに合掌造り民家の保全に関係しては、1963年に「合掌保存組合」が結成された。この組合は、屋根の葺き替え用のカヤを確保することを目的にしていた。かつては、合掌造り民家をもつ家が相互にカヤを融通する「茅頼母子講」にもとづいていたが、合掌造り家屋の減少によって、その制度が立ち行かなくなることを見越し、「茅一〆（ひとしめ）講」へ移行することに賛同する人々によって組合が結成された。この新しい方法は、「一〆」に相当する量のカヤを各戸が毎年拠出することによって、葺き替え用のカヤを確保するというものだった［白川村史編さん委員会　1998a：817］。

そして、県外への合掌造り民家の流出によって外部の人々に生じた関心と、村内で生まれた合掌造り保全への動きが、村外の人と村内の人を結んだ社会的ネットワークを通じ、町並み保存と観光という新たな道を荻町の人々が模索するきっかけをつくった。荻町の住民が、一般に流布されてきた白川村のイメージを意識して語ったことばを借りるならば、「［荻町の人々は］過去も時流に乗っている。［白川郷は］そんなに貧乏なところではない。」火薬（焔硝）、林業、電源、養蚕、など多くの産業が試みられた後に、現在見られる合掌造り民家を使った民宿経営に乗り出すことになったのである。

荻町の町並み保存と観光は、長野県の妻籠宿をモデルにしている。そのモデルが白川村に伝わり、後の「伝統的建造物群保存地区」指定、さらには「世界文化遺産」登録へと発展していった。そして、この２つの歴史的地区を結ぶ媒酌人の役割を果たしたのが、作家・江夏美好だった[3)]。

江夏は、1960年代後半の当時、避暑を兼ねてしばしば荻町を訪れ、親類にあたる人物も含む荻町のリーダーたちと交流していた。リーダーたちの議論は、白川村が「農業立村」を目指すか、「観光立村」を目指すかをめぐって行われていたが、その時に江夏は、長野県の馬籠宿や妻籠宿の例を出し、「観光立村」を説いたという。そして、江夏は親交のあった長野県南木曾町の小林俊彦観光係長を紹介し、白川村は妻籠宿に学びながら「観光立村」への道を進むことになった［白川村史編さん委員会　1998a：818］。

この小林俊彦係長は、後に町並み保存関係者のあいだで有名になる人物で、1960年代に町の観光開発が計画されるなか、木曾の豊かな自然、中山道の歴史的景観、島崎藤村の文学のイメージがもつ観光資源としての重要性に注目し、いちはやく調査や保全に努力していた［小寺 1989：109 - 110］。

そして、1967年に長野県の要請で東京大学の太田博太郎教授（建築史）が妻籠宿の旧脇本陣にあたる建物の視察に訪れた時に、小林係長が熱心に町並み保存に賛同するよう求めたという。小林課長が積極的に働きかけた背景には、1967年が「明治百年」にあたるため、長野県がその記念事業の助成対象を求めていること、そして、その記念事業にふさわしい『夜明け前』（島崎藤村の小説）という材料を妻籠宿がもち、歴史的遺産の保存という文化的色彩の強い事業も助成対象にはふさわしいという理解があった。興味深いことに、建築史上の町並みの価値としては、奈良井や郷原のほうが建物の質も量も優れていたらしい。しかし、最終的に太田教授が

賛同して動き始め、その後の文化財としての町並み保存へ進む道が固まった［小寺　1989：114－115］。

その後妻籠宿では、明治百年事業の保存工事が終わるころ、保存計画をその後も継続していくための財源の見通しが立っていないという不確定性や、予想以上の観光客が訪れたために目先の観光収益へ向かう危険性が露見してきた。そこで住民懇談会が開かれ、その席で太田教授が住民憲章というかたちでルールを明文化することを提案した。そして、この提案が住民に受け入れられ、「［建物を］売らない、貸さない、壊さない」という3原則が盛りこまれた「妻籠宿を守る住民憲章」が1971年7月に制定された［小寺　1989：136－137］。荻町では、この妻籠宿の住民憲章と住民組織を参考にしてさっそく草稿がつくられ、1971年12月に区内の各戸が1名以上出席する臨時の会を開き、「荻町集落の自然環境を守る住民憲章」および「同守る会々則」が全会一致で承認された［白川村史編さん委員会　1998a：820］。

3　「どぶろく」の商品化の始まり

先にも触れたように、荻町の合掌造り集落が世界文化遺産としてもっている特徴は、その特異な建造物の保存を支える住民組織が確固として存在することである。直接的にその保存に関わる代表的な共同作業は、「結」（ゆい）と呼ばれる「合掌」の屋根葺きを行う労働交換の慣行であるが、このほかにも住民が共同で多くの伝統的な行事を行っている。

白川村では、日本の他の農村地帯と同様に、秋に一年の感謝をこめた鎮守の祭りを各集落で行っている。この祭りは各神社の例祭にあたるが、今日「どぶろく」（濁酒）醸造の権利を持ち、祭礼に境内でどぶろくを振舞う、5つの神社の祭礼は、「どぶろく祭り」として知られている。

各集落のどぶろく祭りの日程を暦の早い順に紹介すると、次のようになる。平瀬（平瀬八幡神社）9月25日・26日、木谷（木谷白山神社）10月10日、荻町（白川八幡宮）10月14日・15日、鳩谷（鳩谷八幡神社）10月16日・17日、飯島（飯島八幡神社）10月18日・19日。このうち、荻町は世界遺産の合掌造り集落であり、その北に隣接する鳩谷、さらにその北に接する飯島へと連続して祭りが開催されるため、この3つの神社にどぶろくを求めて多くの観光客が集まる。

筆者の参与観察のなかでも、ある外国人のカップルが荻町の合掌造りの民宿に泊まり、鳩谷、飯島の祭礼にも顔を出しているのを認めることができた。なお、どぶろくの味は、一般に、荻町のものがもっとも甘く、鳩谷、飯島の順に辛口になっていくといわれている。かつては年によって出来、不出来があったが、近年は専門の杜氏による指導も受けて味が安定してきたという。

農家が自家用にどぶろくを造って味わい、神社の祭礼でどぶろくが供えられるということは、伝統的に日本の農村では多く行われてきたと想像されるが、明治維新以降、国家は酒税法に基づいて、庶民のどぶろく製造を規制してきた。いっぽう国家公認としてのどぶろく造りは、神事としての醸造権を申請した神社にのみ可能となった。白川村におけるその神社は、廃村による合祀のために時代ごとの異動はあるが、5つを数える。また全国のどぶろく祭りについての情報を収集したホームページにもとづくと、祭礼にどぶろくを供する神社は44あるが、そのなかで白川村の白川八幡宮、鳩谷八幡神社、飯島八幡神社の醸造量は群を抜いて大きい[4]。

『新編白川村史』によると、今日醸造されている4千から5千リットルもの量が可能となったのは、1962年の酒税法改正により醸造量の上限が大きく緩和されたことによるものと推察できるが、このころ観光客が増えて、大量の醸造の需要が生じたことも併せて窺うことができる。同じ時期に、現在行われているような、どぶろくを容れるための杯を参拝客に配ることが始まり、1978年ごろには、観光客の飲酒運転防止策として、持ち帰り用のどぶろくの二合徳利を使用することが始まっている［白川村史編さん委員会　1998b：412］。

どぶろくは、神社の祭礼用として、原則は最小限の量しか醸造が許されず、境内をこえて持ち出したり、販売したりすることはできない。しかし、観光客が増えてきた1970年代、観光客が買って持ち帰るどぶろくが造れないかと考える人が白川村に出てきた。そして、その実現は、村外の人々との出会いと協力関係によってもたらされることになった。

現在、白川郷の名前を冠した「どぶろく」として、日本各地で売られ、多くの人々に知られているのは、岐阜県大垣市の酒造会社・三輪酒造が出している「純米にごり酒白川郷」という緑色の瓶に詰められたものである。なお、「どぶろく」を再現しているが「にごり酒」となっているのは、酒税法上のカテゴリーが違うためである。どぶろくは、濁酒として「雑種」に分類され、酒造会社が販売用に許可を得ることは最近までむずかしかったため、「清酒」というカテゴリーでの製造許可を得ることになった。「清酒」は、布で濾さなければならないため、本物のどぶろくの持つ米粒の食感や味は、「にごり酒」では少々上品なものになっている。

この「純米にごり酒白川郷」が誕生した経緯について、筆者は2005年に三輪酒造社長・三輪高史氏にインタビューをして聞いた。以下では、そのインタビューに基づいてまとめる。

三輪酒造が白川村に関わるきっかけは、先代の三輪春雄社長が岐阜県の消防団の協会長をしていたことに由来する。ある年、岐阜県の消防団の大会が白川村であり、その席で隣りにいた和田村長が、三輪協会長が酒屋だと知って、話を持ちかけてきたという。

大垣市にある三輪酒造は白川村から遠かったため、当初は業界の伝を頼って、飛騨高山の酒造会社に話を廻した。しかし、高山には1970年代の当時から観光客が多く訪れており、その製品もよく観光客に売れていたため、地元の酒造会社は話に乗ってはこなかった。そのため、三輪社長は自分の会社でやってみることにした。そのころは、美濃地方のなかで、養老の滝、関ヶ原、長良川などの観光地では、観光土産の徳利などがつくられて売られており、先例があった。また、岐阜市の酒問屋に問い合わせをして、流通経路の確認をした。美濃から飛騨へは、郡上八幡から白鳥を経て白川村へと入る経済ルートがあり、「つくれば持っていく」と言われて自信ができた。白川村へ行き、消防団長や村議会議長など村の要職の人々に相談し、「もしよかったら、やってみましょうよ」ということになった。当時は白川村に主要な産業がなかったので、白川村に工場をつくり、地元の人を雇って、今でいう「一村一品」の運動のような計画の走りにしようと話し合ったという。

どぶろくの製品化なので、まずは酒税法のハードルをクリアしなければならない。最初は、大垣の税務署へ相談に行ったが、「できない」と言われた。それから名古屋の国税局の関税部長に相談し、当時あったカテゴリーの「活性清酒」の内容を本庁に掛け合って変更してもらう

ことで、土産用のどぶろくの製造・販売が可能となった。「活性清酒」は生もので、冬季のみ一升瓶に詰めて売るのだが、そのカテゴリーのなかで、生では日保ちがしないため殺菌し、一升瓶ではなく小瓶に詰めて年中販売するということになった。

しかし、白川村で製造するというアイデアは実現できなかった。高山の税務署に相談したが、話が通らなかった。高山の酒造会社が、「国」が違う美濃の会社は来るなと反対したのが理由のようだ。そのため大垣で製造することになったが、白川村の人々は村の中で売ってほしいという希望を伝えてきた。三輪酒造としては、村の外へ製品を売りたかったので、村の宣伝をさせてもらうという条件で村議会からの許可を得た。そのため、にごり酒には「白川郷」という名前を付け、瓶の首には白川村を紹介した栞を付けることになった。

最初の製造は、1976年の夏になる。10月のどぶろく祭りに間に合うように、8月の暑い時期にとりあえず、「つぼだい」と言われる700リットルのタンクを3本仕込んだという。当時のものは「どぶろく風」のものを試作したことになる。白川村のどぶろくは、今のような設備や技術がなく、味は酸味が強く不安定だったので、モデルにはならなかったらしい。

10月10日から1週間、白川村へ出かけて商品を卸していった。村に10軒の酒屋があり、それぞれ10ケースずつ置いていったが、100ケースを置き終わって、最初の酒屋に戻ると、すでに10ケースが空になっていたという。また、発売当初に計画した東京の大丸百貨店での試飲会も好評で、大丸から1年の販売をまかせてほしいという申し出があり、大丸を通じて新宿の酒場へと商品が運ばれていった。

このにごり酒は、当初から売り上げが伸びていき、現在では、300キロ・リットル、60万本が年間生産されている。また2001年からは、「純米にごり酒白川郷」よりも淡白で洗練された味の「純米吟醸白川郷ささにごり酒」という商品が、青いスマートな瓶に詰められて、アメリカ合衆国へと輸出されるようになった[5]。栞は付いていないが、瓶と紙の箱には合掌造り家屋の絵が付いており、ローマ字の文字のなかで、もっとも大きな文字は、「SHIRAKAWAGO」という単語である。

第4章　ベトナム・ホイアンへの協力事業と社会的ネットワーク

1　世界文化遺産・ホイアンの歴史的町並みの概要

ホイアンは、ベトナムの中部地域に位置する。ベトナムは、首都ハノイを擁する北部と、最大の都市ホーチミン市（旧サイゴン）を擁する南部、そして中部の3つに分かれる。中部は、北部に比べて、由緒正しい村の建物や寺廟の建物が少ない。世界文化遺産に登録されているのは、フエにある阮朝に関わる建造物群（1993年登録）、ホイアンの歴史地区（1999年登録）、チャンパ（占城国）に関わるミーソン遺跡（1999年登録）があるが、これらを除き、めぼしい場所がない。それでも早くからベトナム政府が中部の遺跡を世界遺産に登録させるために積極的に動いた理由には、北部・南部と比べて取り上げられることの少ない中部を優先させるという政治的判断があったからだという［新江　2004：113－114］。

ホイアンの旧市街は、16世紀・17世紀ころにつくられ、現在残っている建物の多くは19世紀初頭に溯るとされている。ホイアンは他のベトナムの都市に比べて、規模も大きくなく、長い間繁栄し続けてきた都市ではないが、他の都市にないものがあるため、1995年にベトナムの国家級の遺跡として認定された。その特徴は、豊富で多様な遺跡の集合体であり、各通りや港や建築物の保存状態が比較的よく、各種の無形文化財とともに宗教や民間信仰が生きていることにある［ルー　2001：2］。

ホイアンの繁栄が、日本と密接な関係をもつのは、16世紀末から17世紀初頭の朱印船貿易の時代である。当時の朱印船の主要な渡航先が「交趾」（コウチ、今のベトナム中部）であり、そのなかで常設的に交易活動をするフェフォ（「坡舗」あるいは「会安」、今のホイアン）には定住する日本人もあり、「日本町」が築かれた［岩生　1966：20－31］。

この日本町の存在を今に示すといわれる建築物が、ホイアン旧市街にある。それは「日本橋」あるいは「来遠橋」といわれる、川の上に造られて橋を兼ねる廟である。先に引用した日本町研究の古典、岩生成一著『南洋日本町の研究』では、その碑文を1917年初版、1930年再版の辻善之助著『増訂海外交通史話』から引用している。なお岩生自身も、黒坂勝美とともに1928年にホイアンを訪れている［黒坂　1929：103］。また、同じ碑文については、中越関係史の権威である藤原利一郎も、1943年の訪問をふまえ、戦後にも報告している［藤原　1943；1976］。さらに、日本で生まれ育ち、後にベトナムと香港の大学で教鞭を執った歴史家・陳荊和も、1960年にホイアンで実地調査を行い、中国のアモイに原籍を辿れる郷紳が日本橋の廟を祀ったという興味深い伝説を記している［陳　1970：86－87］。

この日本橋が日本人町と中国人町を分ける境であったとよくいわれるが、そのどちら側が日本人町であったのかについては諸説がある。なお、近年の考古学的研究によると、日本橋の西側にあたるグエンティミンカイ通りは17世紀の居住区と推定されるが、日本町跡として有力視されていた、橋の東側にあるチャンフー通りの南側は、日本が鎖国してからの17世紀末、あるいは18世紀になってから居住が開始された［菊池　2003：96－97］。

多くの建物が19世紀に溯り、旧家の多くが福建省からの移民の子孫であるという伝承をもち、中国人移民の会館の建物が今でも多く残っていることなどを考え合わせると、現在のホイアンの町並みが日本よりも中国の影響を大きく受けていることを想定できる。しかしながら興味深いことに、観光客に対する説明では、ホイアン文化のなかの日本的な要素が大きく取り上げられている。

筆者は2005年に日本橋の西にあるフンフンの家を訪れた時、所有者の親族にあたるアオザイを着た若い女性に家の内部を案内された。その女性の説明では、この家の２階のバルコニーは中国風で、屋根は日本風だという。また、日本橋の東北にある陳一族の祠堂では、その建物を案内する女性から日本語で書かれたＡ４版サイズの説明のプリントが１枚配布された。その紙には、次のような記述がある。

「この寺が建てられた時代には、鎖国によって日本人がホイアンにいなくなってからすでに

長い年月が経っていましたが、和漢越折衷の建築様式はホイアン様式とも言うべきある種の伝統としてこの地の匠たちに受け継がれていました。それ故この寺にもとりわけ屋内装飾に関して日本様式の影響が窺われます。」

このフンフンの家や陳一族の祠堂は、公開している民家にあたる。ホイアンを観光するには、まず7万5千ドン（約700円）の入場チケットを買わなければならない。このチケットを持つと、「博物館」（3つある）、「会館」（3つある）、「古民家」（フンフンの家、陳一族の祠堂を含め4つ）、「無形文化財」（伝統音楽の演奏と手工芸の実演販売をしている建物）、「その他」（関帝廟と日本橋）の5つのカテゴリーから、それぞれ1ヶ所ずつに入場可能である。

2　近年の日本人による研究・保全活動の始まり

先に紹介したように、日本人は、戦前・戦中からホイアンの日本人町に研究上の関心をもっていた。しかし、アメリカ合衆国が介入したベトナム戦争が実質的に集結し、1975年に南北統一が行われた直後には、現在のベトナム社会主義共和国と日本とのあいだの関係はそれほど良好ではなかった。日本政府がハノイ政権を正式に認めた時期は他国よりも遅く、1986年にベトナムが「ドイモイ（刷新）」政策として外国への経済開放を始めた後も、しばらくのあいだ日本は友好国ではなく敵国として遇されてきた。

筆者が文献から知る限り、南北統一後にホイアンの共同研究を始めた先駆者には、富山栄吉がいる。富山は、1984年に統一後初めての外国人としてホイアンを訪れ、クアンナム・ダナン文化委員会から日本関係の資料を提示されている［富山　1987］。また、小倉貞男も、実地の見聞にもとづく1989年の著書『朱印船時代の日本人』を通じ、ホイアンの日本人町の重要性と現状を多くの人々に伝えていた［小倉　1989］

そして1990年にダナンで「古都市ホイアンに関する国際シンポジウム」が開かれ、日本人研究者が積極的にホイアンの日本人町の遺跡に関わるようになった［日本ベトナム研究者会議 1993；　The National Committee for the International Symposium on the Ancient Town of Hoi An 2003］。ベトナムを代表する歴史家、ファン・フイ・レを副会長としたベトナム日本友好協会からシンポジウムの開催が提案され、日本ベトナム研究者会議（1987年結成、初代会長・山本達郎）が全面的に協力し、日本国外務省も開催を支援した。そして、このシンポジウムを契機として、日本とベトナムの共同研究が本格的に始まり、日本人のベトナムでのフィールドワークが可能となった［古田　2000：234 - 236］。

また、このシンポジウムの後、日本ベトナム研究者会議は、日本国文化庁長官に対し、ホイアン町並み保存事業への協力を要請し、さらにベトナムのホイアン史跡保存国家委員会からも文化庁長官宛に支援の要請状が送られた。これを受けて文化庁は、1990年に始まった「アジア太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業」として、1991年度と1992年度には予備調査を行い、その後1993年から10年間、ホイアンの町並みの修復を通じた協力事業を行った［文化庁文化財部建造物課　2003］。

そして、この文化庁の修復事業への参加を通じて昭和女子大学のグループがホイアンの町並み保存に関する大規模な調査研究を行うことになる。文化庁の報告書によると、ホイアンの研究を担当する日本側のグループには、昭和女子大学のほか、日本の複数の大学があげられているが、修復事業における設計の監督は、日本側では、昭和女子大学国際文化研究所と日本建築セミナーの民間ボランティア建築家が行っている。また修復工事の費用については、住民負担分を除く資金とセミナーやシンポジウムにかかる費用の調達・管理を、日本側では昭和女子大学国際文化研究所が行い、1995年6月にベトナム側の窓口として、「ホイアン・ソサエティ」が発足すると、日本からの企業、財団、個人の助成や寄付は、このホイアン・ソサエティを通じて行われるようになった［文化庁文化財部建造物課　2003：4－5］。

現在、日本におけるベトナムの町並みや民家の研究・保存は、昭和女子大学国際文化研究所の友田博通教授（建築学）が中心的な立場にある[6]。一説によると、友田教授は、東京大学教養学部の古田元夫教授（ベトナム現代史）から話があって、ベトナムに関わるようになったという。友田教授と古田教授は高等学校の同級生という関係で、当時古田教授が文化庁の事業でベトナムへ行く建築学者を探していたらしい。

3　民間ボランティアによる草の根の協力事業の始まり

前節のような国家事業としてのホイアンに対する日本人の協力活動が本格化する以前の段階で、日本の個人・民間団体とホイアンの地元の史跡管理委員会とのあいだで協力事業が進められていた。このことは、日本・ベトナムの文化交流史のなかで特筆されるべき出来事である。以下では、その中心人物であった秋葉由紀彦氏が当時著した文章と、2005年に筆者が秋葉氏に行ったインタビューとにもとづいて、その動きを跡付けることにしたい。

1958年生まれの秋葉氏は、中学生の時からベトナム戦争に関心をもち、印刷・デザイン関係の仕事の傍ら、日本でベトナム関係の文献を収集し、日本ベトナム友好協会の機関誌に文章を寄せていた。その後1989年から日本ベトナム友好協会の若手の人々に書く機会を与えるために『ベトナムなんでも通信　タイン・ニエン』（「タイン・ニエン」とはベトナム語で「青年」の意、以下では誌名を『タイン・ニエン』と略す）というタイトルの同人誌を始めた。しかし、結果として文章を書ける仲間がいなかったため、秋葉氏個人が、ほとんど一人で労力と資金を費やし、執筆・編集・制作・発送（無料での郵送配布）を行うことになった。

この『タイン・ニエン』は、ベトナム研究の専門家とベトナムに関心をもつ一般の人々のあいだでは、日本語によるベトナム情報源として高く評価されている。各巻100号分をまとめた合本3冊がつくられて東京神田のアジア文庫で販売されたが、印刷部数が少ないため、現在ではその入手は難しい。なお、筆者の所蔵する合本の第2集と第3集は、頒価が各5千円で、裏表紙にはそれぞれ、その収益金がホイアンへの援助に使われると明記されている。また、秋葉氏はこのほかホイアンに関係して、『暁美さんのホイアン』という写真集を編集し、「ホイアン・心の会」の名義で1993年に発行している。

「ホイアン・心の会」は、ホイアン史跡管理委員会への援助を目的に秋葉氏が1992年に呼びか

けて結成された団体である。1992年３月23日に発行された『タイン・ニエン』第158号では、「『ホイアン・心の会』発足か？」と題する秋葉氏の文章が載り、会の最初の事業として、ホイアンの観光パンフレットをつくって現地へ送る計画があることが読者に知らされた。

なお、この最初の計画でつくられた観光パンフレットの現物が、秋葉氏から筆者に資料として提供された。形式は、両面カラー、３つ折り、６頁（各頁は、200mm×150mm）になる。ホイアンのパンフレットは、絵画編と写真編の２種類がつくられたが、これは写真編にあたる。２つの頁を組にして複写したものを本稿に付して紹介することにする（写真１・写真２・写真３を参照）。

このパンフレットに使われた写真は石本暁美氏の撮影になる。石本氏は1940年生まれの女性カメラマンで、ホイアン・心の会結成のきっかけをつくった。当初は石本氏が会長として現地での交渉に尽力し、秋葉氏が東京で後方支援をするという計画であったが、会が発足してまもなくの、1992年５月27日に石本氏が急逝するという出来事があり、その後の会の運営を秋葉氏が一手に行うこととなった。

石本氏と秋葉氏は、秋葉氏の友人で『タイン・ニエン』の協力者であった加藤則夫氏を介して知り合った。加藤氏の講演会を聞きに行った時にホイアンのことを相談した石本氏に、団体職員であった加藤氏は、自分は十分な協力ができないという理由から、代わりに秋葉氏を紹介したのだという。石本氏は、1989年に初めてホイアンを訪れ、その後1990年と1991年にもホイアンを訪問している。とくに1990年の国際シンポジウムが開かれた直後の時期は、文化庁の援助も本格的には始まっておらず、ホイアンの人々は日本人がこのままホイアンのことを忘れてしまうのではないかという危機感をもっていた。史跡管理委員会を訪れた石本氏に人々は地元への援助を求め、石本氏は帰国後その実現を目指した。秋葉氏によると、石本氏が日本で積極的に動いた背景には、石本氏自身の人生のなかで、その時期に生きがいを探していたという事情もあるという。

秋葉氏によると、当時の会の援助活動は、「金がないので、何をやっていいかわからない」という状況だったらしい。秋葉氏自身は職業柄、印刷物ならつくれるということで、パンフレットと絵葉書をつくってホイアンへ送った。石本氏は当初、ホイアンの史跡管理委員会には、ホイアンの町並みを収めた写真集をつくる計画を話していたようだ。その企画は実現が難しかったが、秋葉氏は石本氏の作品50点を６つ切りの紙に焼いて送っている。そして、その写真を使った写真展がホイアンで1993年に開催されている。前出の『暁美さんのホイアン』は、その展覧会の後、プログラムに近い形式でつくられた写真集である。

また、秋葉氏は、当時から今日まで、日本で入手した貴重な研究文献をホイアン史跡管理委員会へ贈り続けている。現地での修復に役立てる意図で古い写真が載った戦前の本を送ったり、将来日本の研究者が滞在して研究を行う時にも役立つような本を送っている。

ホイアン・心の会が、ホイアンの町並みの修復を直接に行うことは不可能であった。そのため、ベトナム人への精神的な援助を目指したという。そして、そのことに関係して、自分たち［秋葉氏］も日本での精神的な援助を必要としたという。ホイアン・心の会のメンバーには、

1993年5月27日時点で、秋葉氏を除き、16人が名前を連ねているが、そのなかには、日本のベトナム研究をリードする人文系の著名な大学教授が複数含まれている。これらの人々は、資金の援助やボランティア（パンフレットのベトナム語の翻訳など）を通じて実質的に会を支えることもあったが、その存在自体が秋葉氏にとっては会の活動を一人で進めていくうえでの精神的な支えとなっていたようである。

当時秋葉氏が、印刷と発送の作業を進めるうえでは、今日では想像のできないような苦労があった。印刷面では植字をして製版をした。また日本からベトナムへの郵送も不確実で、途中で物資が抜き取られる心配もあった。さらには、ベトナムの行政組織に由来する問題から、仮にベトナムへ無事に物資が送られたとしても、行政組織の末端に位置付けられるホイアン史跡管理委員会が、その物資を当初の目的どおりに使用することが可能かどうかも危ぶまれた。しかし、このような両国間の事情があって、電子メールも普及していなかった時代においてさえも、秋葉氏とホイアン史跡管理委員会とのあいだで、真摯な手紙のやりとりが幾度にもわたって行われたことは、ホイアン・心の会の国際交流が稀有なものであったことを証明している。その郵便のやりとりと手紙の文章については、『タイン・ニエン』の第3集に克明に記録されている。なお、秋葉氏はベトナム語の手紙を書くことができないため、その翻訳には加藤氏をはじめとする会員が協力した。

秋葉氏は、その後、1995年からは昭和女子大学の事業にも協力し、昭和女子大学国際文化研究所が発行する『ホイアン新聞』の編集に携わっている。1998年に発行された『ホイアン新聞』第3号に秋葉氏が書いた「私とホイアン」という文章によると、1995年にホイアン・ソサエティが設立され、ホイアン・心の会が約束していたものを全て送り終えたため、会の活動は休止することになったという。そして、1997年に、秋葉氏は昭和女子大学の依頼を受けて初めてベトナムへ渡航し、ホイアンに足を踏み入れることになった。ダナンからホイアンへ車で入ると、通行税を使ってきれいに整備された道路を通った。その道路を見て、ホイアン・心の会の活動が終わったと身をもって感じたという。

秋葉氏は、現在のホイアンについて、市民のための祭りを開き、市民のためのホイアンを目指しているホイアン市長の政策に好印象をもっている。いっぽう昭和女子大学の町並み保存修復活動については、上智大学のアンコール・ワット修復に対する活動と比較しながら、ベトナム人の保存修復者を育てられなかったという点ではよくなかったという。しかし、その原因については、ベトナムとカンボジアの文化政策の違いに由来するとも考えている。

第5章　ハードからソフトへ、中心から周辺へ

本稿のもとになる研究のアイデアは、2003年9月に大阪で白川郷の関係者と面会する機会を得たことから生まれた。9月13日から15日にかけて、ホイアンでは日越国交成立30周年を記念して「文化遺産地区の保存と国際協調に関する国際シンポジウム」が開かれ、この会議に世界遺産白川郷を代表して参加する三島敏樹氏と近藤久善氏が、ベトナムへの出国のために大阪を

訪れた。同僚の尾上正人助教授から誘われて、関西国際空港近くのホテルで一緒に2人を迎えた。三島氏によると、今回の会議参加は、白川郷の世界遺産登録に関わった斎藤英俊氏（建築史、現筑波大学教授）から誘われて実現したという。

筆者は、ちょうど香港での1年間の在外研修を終えて帰国したばかりで、このようなかたちで関西国際空港へとすぐまた足を運んだことを、とても不思議に感じていた。さらに白川郷の人々がホイアンへ出かけるということにも意外な印象をもった。

誤解をおそれずにいうと、荻町は日本を代表する観光地であるが、山深く、人口も少ない小さな村である。また、ホイアンはかつての国際貿易港とはいえ、今ではホーチミン市やダナンとは比べものにならないような、古びた小さな町にすぎない。もちろん、白川郷には空港がなく、ホイアンにも空港はない。しかし、飛行機で行き来する時代に、世界遺産という共通の枠組みのなかで、日本の周辺の地とベトナムの周辺の地が直接に結びついてしまうことに、何とも言い難い感慨と興味を抱かされた。

冷静に考えてみると、荻町集落とホイアンの旧市街が共通に抱えている問題は多い。世界遺産登録の後、小さな場所に多くの観光客が押し寄せるようになったが、その観光開発と遺跡保存をどのようにして両立させていくのか。町並み保存として、どのようにして住民を遺跡の保全と活用に参加させていくのか。また、どのようにして木造の建築物を災害から守っていくのか。アジアの歴史的地域に共通する世界遺産研究の重要な課題をいくつも思い浮かべることができる。

しかし筆者は、白川郷とホイアンの世界遺産についての研究を進めるなかで、今まで指摘されることの少なかった部分に目を向けるようにもなった。文化財や遺跡の専門家が関わることの重要性や、地元の自治体や住民組織が積極的に取り組むことの重要性は、誰の目にも明らかである。しかし、世界遺産の保全と活用のうえでは、一般企業など、研究や行政とは異なるセクターや、地元の人々ではない外部の人々も大きな役割を果たすことができるかもしれない。そして、その実現のうえでは、個人と個人がとり結ぶ社会的ネットワークが重要である。本稿で扱った、どぶろくの商品化や、民間の日越交流活動は、その世界遺産をめぐる動きの広がりを示す事例である。

2001年から始めた白川郷の世界遺産研究を通じ、いわば周辺的な場所に見られる周辺的な課題を発見したといえるかもしれない。しかし、周辺的であることは必ずしも重要性が相対的に低いことを意味しない。むしろ近年は、日本においても今まで大きく注目されることはなかった周辺的な場所が世界文化遺産に推薦される傾向にある。そして、その根拠も、建築物に具現化される「有形」文化財としての要素ばかりではなく、「無形」文化財としての要素が重要視されるようになってきている。この流れのなかで、今後は世界遺産研究も、遺跡や建築物という「ハード」から、それを保全・活用している人々という「ソフト」へと対象を広げ、人文学的アプローチに社会科学的視点を加えていかなければならない。

日本の中心・奈良において奈良について研究し、奈良の世界遺産を中心に世界遺産研究を発信することは、いわば何ら工夫の要らない作業である。しかし、いったん奈良から目を外へ向

けてみるならば、世界遺産の保全と活用について、人々が様々な努力を行っていることに気付かされる。この現実の社会の動きから学んでもなお、世界遺産研究に新たな工夫を加えることができないのであれば、奈良に対する一般的な負のイメージと同様、私たちは「保守」や「怠慢」という形容詞を引き受けざるをえないであろう。

注

1） 2002年3月18日に奈良大学総合研究所が開催した、法隆寺管長・大野玄妙師の講演会（演題「法隆寺と世界遺産」）にて聞いた内容にもとづく。
2） 文化人類学の学会誌には、1896年に白川村の習俗についての短い報告が載っており、そのなかでは、「此地習慣ノ奇ナルハ多人数合居ナリ別家ヲ為スヲ忌ミタルヲ以テ一家内中壮年ノ男女幾人アルモ相続人ノ外嫁ヲ娶リ聟ヲ引受ケ正当ノ結婚ヲナスヲ許サズ他ハ皆私通スルノミ併シ人倫ヲ乱ス者ハ更ニ無シト」［藤森　1896：306］（ただし原文の旧漢字を現在一般に使われている漢字に改めた）という文章以下、白川村の家族生活や民家について多くを記述している。
3） 江夏美好の白川郷に関する作品については、林正子の論文がある［林　2004］。
4） 製作者・製作年不詳「大府市無形民俗文化財長草天神社どぶろく祭り・全国のどぶろく祭り」（http：//www. medias. ne. jp/~fzen/newpage3. htm）、2004年5月1日参照。
5） このアメリカ合衆国進出は、日本酒類販売株式会社海外事業部が全国の酒30種にラベルを付けて輸出するという企画に乗ったことから始まった。なお、1990年代半ばに始まる地酒の輸出ブームについては、住原則也の研究が詳しい［Sumihara 2004］。
6） 昭和女子大学のグループは、ホイアンを始めとした民家の調査・修復が主たるフィールドである。このほか、ベトナム建築についての著名な建築史のグループには、フエ王宮の調査・修復を行っている中川武研究室（早稲田大学）、洋館の研究をしている藤森照信研究室（東京大学）、チャンパ遺跡の研究をしている片桐正夫研究室（日本大学）がある［友田　2003：210］。

引用文献

ブキャナン、マーク（阪本芳久訳）2005 『複雑な世界、単純な法則　－ネットワーク科学の最前線』、草思社

文化庁文化財部建造物課　2003 『旧国際商業港ホイアンにおける保存協力事業の記録』

陳荊和　1970 「会安明香社に関する諸問題について」、『アジア経済』、第11巻第5号、79－92頁

藤森峯三　1896 「飛騨ノ風俗及其他」、『東京人類学会雑誌』、第29号、305－311頁

藤原利一郎　1943 「佛印紀行の一節　－ユエよりツーラン・フェフォへ」、『東洋史研究』、第8巻第3号、40－48頁

藤原利一郎　1976 「ホイアンの日本橋碑文について」、『南方文化』、第3輯、147－150頁

古田元夫　2000 「日本におけるベトナム研究」、木村汎/グエン・グイ・ズン/古田元夫編『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』、世界思想社、227－240頁

林正子　2004 「白川郷保全に向けての文学の意義　－地域文化遺産としての江夏美好『下々の女』論」、合田昭二・有本信昭編『白川郷　－世界遺産の持続的保全への道』、ナカニシヤ出版、139－181頁

石井昭　2005 「世界遺産とは何か　－推薦・審査・登録の実態」、『都市問題』、2005年6月号、4－8頁

岩生成一　1966 『南洋日本町の研究』、岩波書店

菊池誠一　2003 『ベトナム日本町の考古学』、高志書院

小寺武久　1989 『妻籠宿』、中央公論美術出版

黒坂勝美　1929 「安南普陀山霊中佛の碑について」、『史学雑誌』、第40編第1号、103－108頁

ミッチェル、J・クライド　1983 「社会的ネットワークの概念と使用」、J.C.ミッチェル編（三雲正博・福

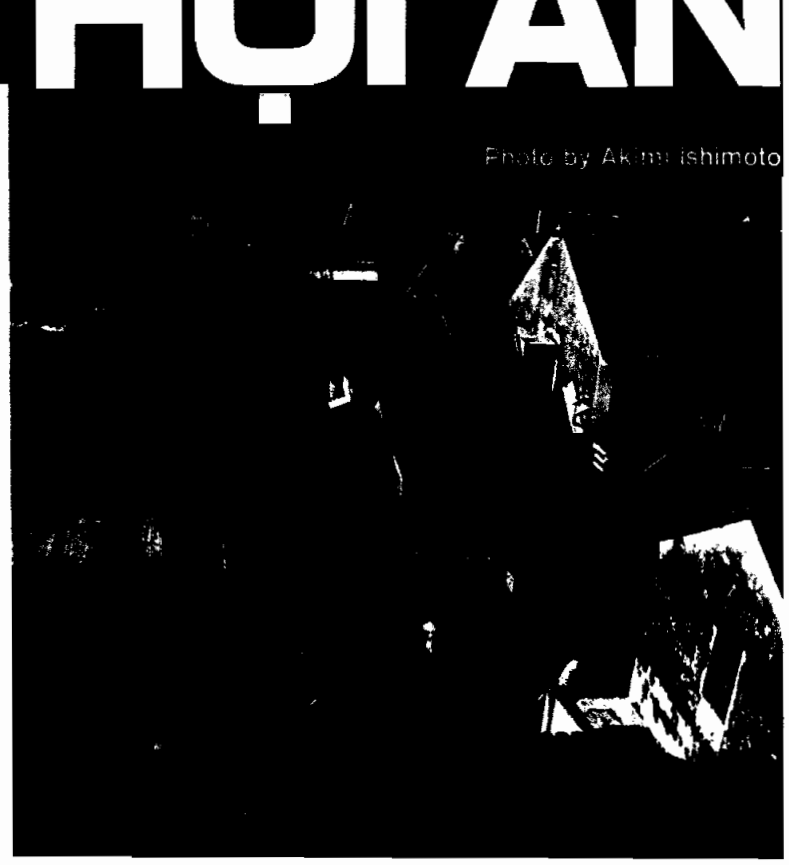
島清紀・進本真文訳)『社会的ネットワーク　－アフリカにおける都市の人類学』、国文社、9－42頁
奈良大学文学部世界遺産を考える会編　2000 『世界遺産学を学ぶ人のために』、世界思想社
日本ベトナム研究者会議編　1993 『海のシルクロードとベトナム　－ホイアン国際シンポジウム』、穂高書店
小倉貞男　1989 『朱印船時代の日本人』、中央公論社
ルー、チャン・ティユ（菊池誠一訳）　2001 「世界遺産ホイアンの現状と保存活動」、『日・越考古学』、第2号、1－4頁
Scott, John 1991 *Social Network Analysis : a Handbook*, London : Sage Publications
新江利彦　2004 「フエ・ホイアン・ミーソン　－中部の世界遺産」、今井昭夫・岩井美佐紀編『現代ベトナムを知るための60章』、明石書店、113－117頁
白川村史編さん委員会編　1998a 『新編白川村史・中巻』、白川村
白川村史編さん委員会編　1998b 『新編白川村史・下巻』、白川村
Sumihara, Noriya 2004 "*Tradition* as a Solution to the Crisis of Japanese Sake Industry", *Agora : Journal of International Center for Regional Studies*, No. 2, pp. 27－37
竹中宏子　2005 「『遺産』を担う、もう1つの主体像　－スペインの世界遺産『サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路』に関わるボランタリー・アソシエーションの事例から」、『白山人類学』、第8号、69－89頁
The National Committee for the International Symposium on the Ancient Town of Hoi An 2003 *Ancient Town of Hoi An*, Hanoi : The Gioi Publishers
富山栄吉　1987 「ホエアンの合同調査」、『東亜』、1987年12月号、7－9頁
友田博通編　2003 『ベトナム町並み観光ガイド』、岩波書店
ワッツ、ダンカン（辻竜平・友知政樹訳）　2004 『スモールワールド・ネットワーク　－世界を知るための新科学的思考法』、阪急コミュニケーションズ

写真1

VIET NAM

HỘI AN

Photo by Akimi Ishimoto



ホイアンはダナンの南東30km、トゥーボン川の北に位置する市です。面積は60km²、人口は7万人で、3つの町、6つの村、及び15km沿上にある島々をまとめた1つの村よりなっています。

国内シンポジウム(1985年)、国際シンポジウム(1990年)、及び最近の調査研究により、先史時代(2世紀以前)、チャンパ時代(2～15世紀)、大越時代(15～19世紀)の各時代毎のホイアンの様子が明らかになってきました。なかでも、大越時代にホイアン港は、国際交易の主要な中継基地の一つとして数世紀にわたり大いに栄え、世界的にもその名を知られていました。ポルトガル、スペイン、イタリア、オランダ、イギリス、フランス、日本、中国、インドなどの世界中の高級が港に出入りし、毎年4～6カ月滞在で市が立つこともです。外国の商人の中には、商館・商店を開いたり、定住する人もいました。特に日本人と中国人は、自分達の町をつくって自ら町長を選び独自の生活を営むことを許されていました。最盛期には日本人町に1000人以上、中国人町には6000人もの人々が住んでいたといわれます。

何千もの様々な歴史的遺産のほか、発掘された考古学的出土品や、長世代を経た民間伝承などが一体となって、貴重なホイアン史跡を形づくっています。ここには世界中から何万人もの人々が、観光や研究のために訪れています。

このホイアン史跡のほかに、周囲には海水浴場や島々を備えた風光明媚な白島や、豊富な海の幸、素晴らしい伝統的郷土料理などがあります。このため、ホイアンは観光、文化交流、経済交流にふさわしい所であり、内外の観光客を十二分に魅惑させてくれるでしょう。

その上、もし皆さんがホイアン史跡管理委員会の専門家の案内でこの街を散策すれば、きっと更に思いもかけない様々の発見があることでしょう。

ホイアン史跡管理委員会

Cách Đà Nẵng 30 km về phía Đông-Nam, trên bờ Bắc sông Thu Bồn, có diện tích 60 km² với số dân 7 vạn người, Thị xã Hội An gồm 3 phường, 6 xã và một xã hải đảo cách đất liền 15 km.

Kết quả hội thảo khoa học quốc gia (1985), hội thảo khoa học quốc tế (1990) và các chuyên đề khoa học nhiều lĩnh vực gần đây đang làm rõ diện mạo lịch sử Hội An từng trải các thời kỳ : Tiền-Sơ sử (từ TK II trở về trước) – Champa (TK II – XV) – Đại Việt (TK XV – XIX); trong đó thời kỳ Đại Việt, thương cảng Hội An là một trong những trung tâm trung chuyển mậu dịch quốc tế, nơi giao dịch thương mại phồn vinh nổi tiếng trên thế giới suốt trong nhiều thế kỷ, thương thuyền các nước Bồ Đào Nha, Tây Ban Nha, Ý, Hà Lan, Anh, Pháp, Nhật Bản, Trung Quốc, Ấn Độ ... thường xuyên cập bến, hàng năm mở hội chợ từ 4 – 6 tháng liền. Nhiều thương nhân nước ngoài lập thương điếm, mở cửa hàng hoặc định cư. Đặc biệt, người Nhật Bản, người Trung Quốc được lập phố sống theo phong tục riêng, cả Thị trưởng điều hành. Phố Nhật lúc cực thịnh có trên ngàn người, Phố Hoa lúc cao điểm tới 6,000 người.

Hàng ngàn di tích thuộc nhiều loại hình kiến trúc hiện trạng trên mặt đất cùng các tầng văn hóa khảo cổ, folklore qua nhiều thế hệ hợp thành quần thể di tích Đô Thị Cổ Hội An quý hiếm, đã và đang thu hút hàng vạn người thuộc nhiều quốc tịch đến tham quan, nghiên cứu khoa học.

Đô Thị Cổ Hội An cùng với nắng, bãi tắm, hải đảo, cảnh quan thiên nhiên độc đáo, hải sản phong phú, các món ăn truyền thống hấp dẫn ... sẽ là nơi du lịch thích hợp, giao lưu văn hóa-kinh tế thuận tiện đáp ứng đầy đủ những sở thích, khát vọng của du khách trong và ngoài nước.

Tuy nhiên, sẽ còn nhiều lý thú bất ngờ nếu bạn đến để tìm hiểu sâu về vùng đất này khi được tiếp xúc với các cán bộ chuyên môn của Ban Quản Lý Di Tích Hội An.

Ban Quản Lý Di Tích Hội An

制作・協力「ホイアン・心の会」Hội Bạn Hữu Cho Hội An (現不明・後後現) *Kính dâng tương niệm Chị Ishimoto Akimi*

Ảnh 石本晃美 Ishimoto Akimi

Người trình bày 秋葉由紀彦 Akiba Yukihiko

Người hợp tác 櫻井洋子 Sakurai Youko　加藤栄 Kato Sakae
加藤則夫 Kato Norio　渡辺重昭 Watanabe Shigeaki
小柴善一郎 Koshiba Zen'ichiro　古田元夫 Furuta Motoo
桃木至朗 Momoki Shiro　青柳洋治 Aoyagi Yoji
重枝豊 Shigeeda Yutaka　藤野彰 Fujino Tadashi
角銀ゆかり Kakurai Yukari　冨田健次 Tomita Kenji

「ホイアン・心の会」事務局 〒112 東京都文京区白山4-29-16 秋葉由紀彦方

写真 2

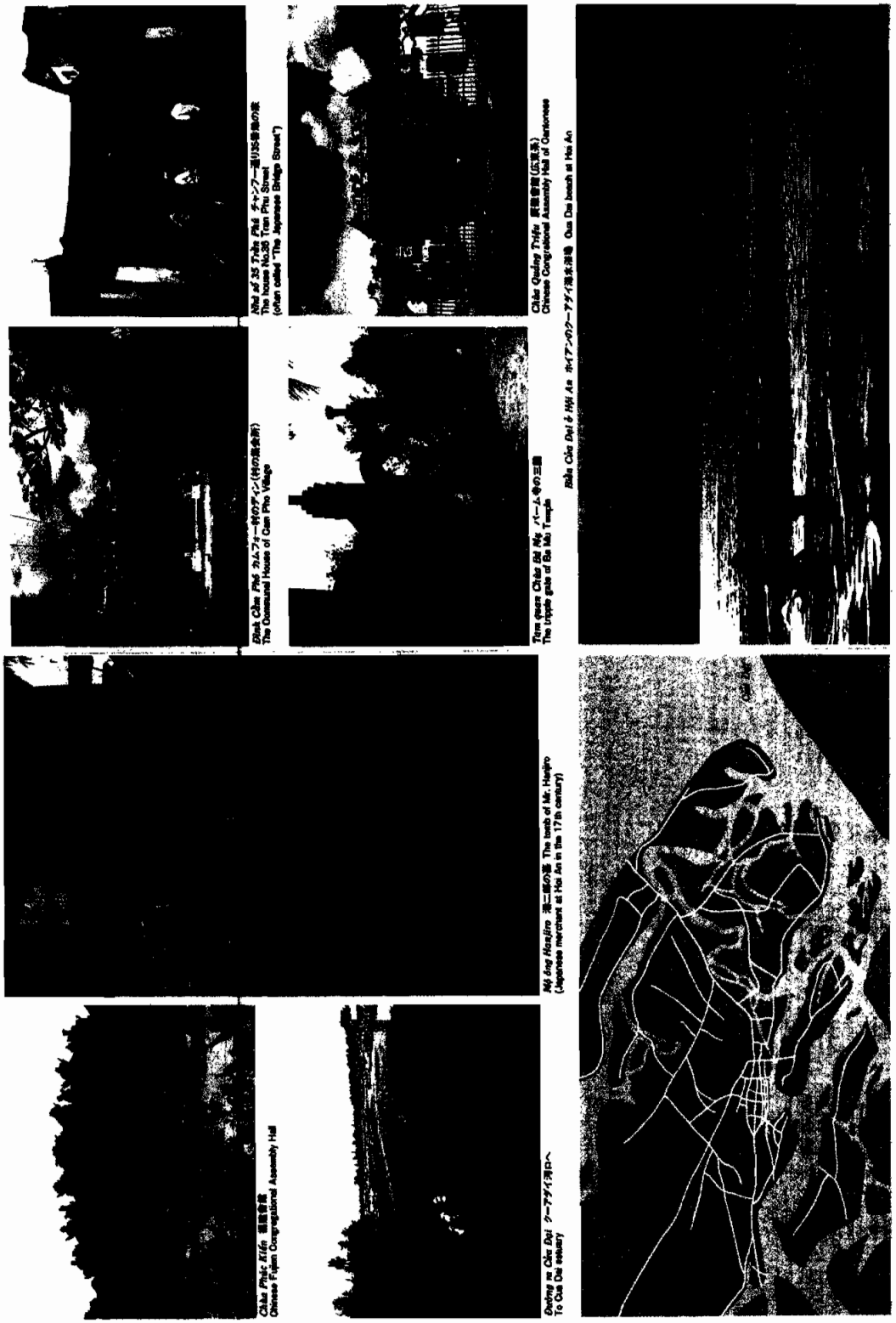
Bến Hải Hội An ホイアンの港つ港 River Port of Hoi An

Chùa Chúc Thánh 祝聖寺
Chuo Thanh Pagoda

Quan Công Miếu 関帝廟
Quan Cong's Temple

Tháp Đa Bảo ở Chùa Long Tuyền 龍泉寺の多宝塔
Da Bao tower at Long Tuyen pagoda

写真 3


Nhà số 35 Trần Phú チャンフー通135番地の家
The house No.35 Tran Phu Street
(often called "The Japanese Bridge Street")
Chùa Quảng Triều 広東会館
Chinese Congregational Assembly Hall of Cantonese
Bãi Cửa Đại ホイアンのクーアダイ海水浴場 Cua Dai beach at Hoi An
Bảo Quan Phố カムフォー村の集会所
The Ocamural House of Cam Pho Village
Tam quan Chùa Bà Mụ バーム寺の三門
The triple gate of Ba Mu Temple
Mộ ông Hanjiro 漢二郎の墓 The tomb of Mr. Hanjiro
(Japanese merchant at Hoi An in the 17th century)
Chùa Phúc Kiến 福建会館
Chinese Fujian Congregational Assembly Hall
Đường ra Cửa Đại クーアダイ河口へ
To Cua Dai estuary